

令和7年度

平川市議会議員研修視察

(市政公明)

研修視察テーマ

(1) アバター（メタバース）を活用した授業について

【中泊町】

葛西 勇人

## 1 研修視察期間

令和8年1月27日～28日（2日間）

## 2 参加者名簿

○出席議員 議員 中畑 一二美 議員 葛西 勇人

○随行職員 なし

## 3 研修内容

### (1) アバター（メタバース）を活用した授業について

#### ア) 研修日時

令和8年1月28日（水） 午後1時30分～2時30分

#### イ) 研修場所

中泊町役場

（住所）青森県北津軽郡中泊町中里紅葉坂209

#### ウ) 研修目的

メタバースを活用した英語教育の実践や授業運営の工夫、学習効果等について研修し、当市の教育施策の充実に資する知見を得ることを目的とする。

#### エ) 研修概要

##### ○ 視察・意見交換の概要

今回の意見交換では、中泊町が進めている「**教育イノベーションプロジェクト**」のうち、特にメタバースを活用した英語教育・国際交流事業について説明を受けた。

あわせて、同町が進める義務教育学校の整備、公設塾事業、部活動の地域移行など、教育改革全体の方向性についても話を伺った。

説明の中では、**人口減少や社会の急速な変化を踏まえ、従来型の教育施策だけでは子どもたちが将来取り残される可能性があるとの問題意識**が示された。そのうえで、地域に愛着を持ち、世界でも活躍できる人材を育てるために、教育委員会主導で新たな施策に取り組んでいることが確認できた。

##### ○ 中泊町教育イノベーションプロジェクトの趣旨

中泊町では、教育を取り巻く環境の変化が非常に早いことから、従来の教育政策のみでは十分に対応できないとの認識のもと、「中泊町教育イノベーシ

ョンプロジェクト」を立ち上げている。

このプロジェクトの背景には、主に次のような問題意識がある。

- ① 人口減少が進む中でも、子どもたちには日本国内だけでなく世界で活躍できる力が必要であること
- ② 将来町を離れたとしても、子どもたちが中泊町のことを考え、将来的に地域に関わろうと思えるような教育が必要であること
- ③ 単なる知識習得だけではなく、豊かな人間性や主体性、コミュニケーション力を持つ人材育成が求められていること

※中泊町教育イノベーションプロジェクトの理念

**① 世界－Global－**

小さな町、小さな日本にこだわらず、世界で活躍できる、通用する人材を育成、教育することを目的にした事業

**② 交流－Exchange－**

人と人のつながりを重視し、交流することで生まれる人的ネットワークを構築・強化することを目的にした事業

**③ 誇り－Pride－**

町外に出て行っても、中泊町に生まれてよかった、いずれ帰ってきたい、町を誇りに思えることを目的にする事業

**④ 未来－Future－**

現在や過去だけを見るのではなく、未来に向けた投資を行い、将来のまちづくりの礎となる事業

**⑤ 先進－Advance－**

既成の常識・概念や事業にとらわれず、柔軟な発想で行われる他市町村や全国に先駆けた事業

**⑥ 豊かさ－Well-being－**

物質的な豊かさを求めるのではなく、人間らしい心の豊かさと人間性を育み、人生の幸福度を高めることを目的にした事業

こうした考えのもと、教育委員会ではいくつかのテーマに分類しながら重点事業を推進しており、メタバース英語教育は其中でも「世界」「交流」「先進」に関わる重要事業として位置付けられている。

## ○メタバースを活用した英語教育の概要

### (ア) 事業のねらい

この事業は、家庭の経済力に左右されず、すべての子どもが海外や異文化と接点を持ち、実践的な英語コミュニケーション能力を身につけることを目指している。

通常、英語力を身につける手段としては留学が想定されるが、全児童生徒を海外に行かせることは財政的に困難である。そこで中泊町では、メタバース空間やオンライン技術を活用して、海外の人々と交流する教育環境を整備することにした。

### (イ) 重点目標

中泊町では、中学校卒業までに次の3点を重点目標としている。

- ・ネイティブスピーカーとコミュニケーションができること
- ・自らの意見を英語で発表できること
- ・異文化を躊躇なく受け入れることができること

小学校では英語の「音に慣れること」「聞くこと」に重点を置き、中学校では「聞く・話す・伝える」ことを重視している。

## ○教育課程上の位置付け

この取組は単発のイベントではなく、教育課程を正式に変更したうえで進められている。

具体的には、総合的な学習の時間を活用し、その一部を「グローバル科」的な内容へ転換して実施している。

説明によれば、

- ・年間の総合的な学習の時間は70時間あり、そのうち35時間を英語・国際交流に関する学習へ変更
- ・この変更を行うために、国へ申請し、「教育課程特例校」としての指定を受けている

ということであった。

令和6年度は一部校で試験的に実施し、令和7年度からは小学校3年生から中学校3年生まで全校展開している。

## ○ 実施内容

年間 35 時間の主な内訳は次のとおりである。

### (ア) オンライン英会話レッスン (年間 31 時間)

- ・各学校に配備されているタブレット端末を使用
- ・委託事業者が作成した中泊町オリジナル教材を活用
- ・外国人講師 1 人に対し、児童生徒 2 人でレッスン
- ・主にフィリピン人講師が担当
- ・年 2 回、スピーキングテストを実施

少人数での実施により、子どもが実際に「話さなければならない」環境をつくっている点が特徴である。

### (イ) ライブスタディツアー (年間 2 時間)

現地の街並みや生活、文化などをライブ配信でつなぎ、子どもたちが英語で買い物体験や対話を行う。

単なる映像視聴ではなく、現地との双方向のやり取りを通して、実践的なコミュニケーションを学ぶ内容となっている。

### (ウ) オンライン国際交流 (年間 2 時間)

フィリピンの学校の児童生徒とオンラインで交流し、会話や簡単な活動を行う。

英語学習だけでなく、異文化理解や人的ネットワーク形成につながる取組として位置付けられている。

## ○ フィリピンとの連携について

中泊町は、令和 6 年 5 月に、以下の 3 者で国際交流の推進に関する連携協定を締結している。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・中泊町</li><li>・セントラル大学 (フィリピン)</li><li>・委託事業者 (クラスメイト株式会社)</li></ul> |
|---|

この協定に基づき、英語教育全般、オンライン・オフラインのハイブリッド型留学、児童生徒の文化交流などを進めている。

フィリピンを連携先とした理由としては、以下の点などが挙げられていた。

- ・英語が広く使われていること
- ・東南アジアの中でも成長力が高い地域であること
- ・将来のアジアとの関わりを考えるうえで有効であること

## ○実施して見えてきた課題

全校展開したことで、取組の有効性だけでなく課題も明らかになってきている。

### (ア) ネットワーク環境の課題

児童生徒数の少ない学校では大きな問題がなかったが、規模の大きい学校では、同時接続数が増えることで、通信速度の低下、接続不良、午後の時間帯の通信不安定、などが生じている。

ただし、将来的に令和11年度には中里地域で義務教育学校（9年間）の開校を予定しており、その前提の中で大規模投資がしにくい事情もあるため、できるだけ低コストで改善できる方法を模索中とのことであった。

### (イ) 授業内容の難易度

当初は日本語を一切使わないオールイングリッシュを進めていたが、児童生徒によっては内容が難しく、理解や対応が追いつかないケースもある。そのため、日本語を補助的に入れるべきか、教材の難易度を下げるべきか、子どものモチベーションをどう維持するか、といった点について、教育委員会と委託事業者が協議を重ねている。

### (ウ) 機器・メタバース上の不具合

音声が聞こえない、マイクが入らない、映像が映らない、PC設定の不具合などの問題もあるが、こちらについては事業者がサポートし、都度対応しているとのことであった。

### (エ) 費用面の課題

現在のグローバル科に係る経費は以下のとおりである。

■授業委託に係る経費

- ・小学校3年生から中学生までの355人分：約2,350万円

※1人あたり年間おおむね6万7千円程度、概ね7万円前後

※令和7年度は国の補助金を活用できているが、次年度以降は町単独負担となる可能性があり、継続財源の確保が課題となっている。

■授業委託以外の経費

- ・ヘッドセット購入費：約100万円
- ・通信環境強化費：年間約50万円
- ・ICT支援員の配置費：年間約300万円

○子どもたちや教員の反応

説明の中では、子どもたちや教員からの前向きな感想も紹介された。主な反応としては、以下のとおりである。

- ・最初は不安だったが、やってみると楽しかった
- ・外国の人と話すことに対する抵抗感が薄れた
- ・うまく通じた体験が自信につながった
- ・言葉が完璧でなくても、まず伝えようとする姿勢が育ってきた
- ・新しいことに挑戦してみようという意欲が出てきた

以上のような声があり、英語力そのものだけでなく、**挑戦心やコミュニケーション意識の変化にも効果が見られている**ようであった。

また、ヘッドセットを使うことで周囲の音が遮られ、**特性のある子どもが集中しやすい面もある**との話があった。

○今後の展望

今後は、現在のオンライン交流だけでなく、実際の海外渡航も視野に入れているとのことであった。

具体的には、以下の構想が示された。

- ・令和8年度は実施しないが、その後に中学生をシンガポール等へ短期派遣したい
- ・セントラル大学との連携を広げ、将来的には進学ルートにもつなげたい
- ・青森県内高校（現在は、青森南高校が実施）との接続も見据え、継続的な英語教育・国際交流の流れをつくりたい

単に英語を学ぶだけではなく、将来的に地域の担い手となる子どもたちが、外の世界を知ったうえで、中泊町に恩返ししたい、地域に関わりたいたいと思えるようになることが最終的なねらいであると感じられた。

#### ○ その他の教育改革の動き

今回の説明では、メタバース英語教育以外にも、次のような教育施策が進められていることが紹介された。

##### (ア) 義務教育学校の整備

中里地域では、令和11年度の開校を目指して義務教育学校の整備を進めている。1人の校長のもと、9年間を一体的に見通した教育課程編成が可能となる点が特徴であり、学校再編と教育内容改革をあわせて進めている。

##### (イ) 公設塾事業

小学5年生から中学3年生までを対象とし、無償の公設塾を実施している。明光義塾への委託により運営しているとの説明であった。

##### (ウ) 部活動の地域移行

中学校部活動については、地域移行を段階的に進めており、将来的にはスポーツ以外も含め、子どもたちの多様な関心に応じた活動の場づくりを検討している。

#### オ) 研修所感（当市との比較、導入効果など）

今回の説明を通じて強く感じたのは、中泊町が単に「珍しい取組」をしているのではなく、人口減少時代の地方教育をどう変えていくかという大きな課題に、かなり本気で向き合っているということである。

特に印象的だったのは、次の点である。

- ・英語教育を「受験のため」ではなく、実際に話し、異文化と接するための力として捉えていること
- ・留学が難しいなら、ICT やメタバースを活用して代替ではなく新しい学びの形を作ろうとしていること
- ・小規模自治体であっても、工夫次第で先進的な教育に踏み出せることを示していること
- ・教育改革を、学校現場の話だけでなく、地域の将来や人材育成、まちづくりと結びつけて考えていること

一方で、通信環境や費用負担、子どもによる理解差への対応など、持続的に進めるための課題も明確である。今後は、効果検証を丁寧に行いながら、子どもたちにとってより良い形に改善していくことが重要である。

中泊町の取組は、英語教育、ICT 活用、国際交流、学校再編を一体的に進めるものであり、地方における新しい教育モデルの一つとして大変参考になる内容であった。

少子化が進む地域においても、子どもたちが世界とつながり、自分の意見を持ち、地域への思いも育てる教育を実現しようとしている点は高く評価できる。今後の成果や課題の整理を注視しつつ、他自治体でも参考にできる部分が多いと感じた。

■青森県庁のホームページでも紹介されております。以下のURLをご参照下さい。

[https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/seisaku/dxsuishin/column\\_2510\\_01.html](https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/seisaku/dxsuishin/column_2510_01.html)

以 上